やめよ！徳山ダム
徳山ダム建設中止を求める会通信
Ｎｏ．９２（２０１２．１．１１）
事務局　TEL/FAX 0584-78-4119
大垣市田町１－２０－１　近藤方

「休会」に際して

「徳山ダム建設中止を求める会」の活動は、ここで締め括り、休会に入ることに致します。徳山ダムが完成し、運用が進んでいくこの段階で区切りをつけることにしました。

徳山ダムは、私達が検証を求めてきた課題を審議するにあたり、発想の転換をすることなく、従来の視点に立っての吟味に終始して何の進展も見られませんでした。

ダム建設の一番の目的は「利水」にありました。そこへ「水あまり」問題が持ち上がり紛糾しました。私達は弁護団を結成し、利水の実績を巡って精緻な資料を提示して、明快な論証のもとに「水需要予測」の検証を法廷で求めました。しかし、裁定にあたって、その論証は取り上げられず、将来の「水需要」に大きな禍根を残す結果となりました。

使う宛のない水の皺寄せ先として「長良川導水路」が浮上してきました。当然ながら、「長良川に徳山ダムの水はいらない」のです。今、「長良川市民学習会」で、議論を展開中です。

治水問題も多くの疑問を抱えています。徳山ダムの完成を受けて、これで住民の生命・財産は守れ「安心・安全だ」との機運が高まり、流域の治水対策に何の手だても講じないでいるありさまです。

岐阜県の西南濃に広がる輪中地帯には、癖のある中小河川が網の目のように繋がり、相互に利害を分けあいながら、水害による辛酸を多かれ少なかれ舐めてきました。

徳山ダムのある揖斐川本流、その派川の中之江川、柿ノ木戸用水、排水路をかねた新規川は、大垣市の東部が流域です。かつての本流杭瀬川が流れる西部は支派川が入り組んでいる地域です。一旦水が出ると暴れ川となる牧田川、洗堰を残したままの大谷川、いちはやく溢れてくる相川、泥川などが隣り合っています。市内には大垣城の外堀として開削された水門川、牛屋川が流れています。

これらの河川は、豪雨に見舞われると出水の時間と水量を異にしながら、せめぎあいながら、揖斐川との合流点に流れ込んできます。しかし、激しい流れの揖斐川本流に押し戻され、逆流が起こります。逆巻く濁水と上流からの濁流によって、手のつけようもない氾濫状況となります。越流水が村内に流れ込み、勢いが盛んになるにつれて破堤の危険に曝されます。水害が発生するまでの時間は、堤防の高低や強弱により場所ごとに異なり、水害の起こるメカニズムは複雑です。ですから、それぞれの河川の特性に応じた治水対策が不可欠となります。

この点、注目したいのが遊水地です。佐賀県多久市の牛津川に造った牟田遊水地が、実際に０９年の洪水のとき活用され、下流の破堤を防ぐのに役立ちました。

徳山ダムは、莫大な費用をついやして環境影響調査をしたのですが、大型猛禽類の保全策を立てないまま本体工事に着工してしまいました。ダム完成によって環境が変化したのですから、完成後の調査は当然必要であるにもかかわらず調査は打ち切られています。したがって、ダム完成後のイヌワシ・クマタカの動向を掴むよすがはなくなっています。これでは大型猛禽類を

絶滅の危機から救うビジョンが成り立つわけがありません。

そんななか、問題は向こうからやってきました。何とダム湖周辺にカワウがいるというのです。誰かが魚を放流したからだとか、アマゴ・イワナを見た人がいたとか、と伝わってきました。魚がいればカワウには好都合、餌はあるし、営巣には河畔林を目論んでいるのでしょう。集団性と適応力にたけているカワウは、格好の棲み家だとばかりに、領域を広げてきたのでしょうか。このありさまは、決して楽観視してよいものではなく、生態系に影響をもたらす危険を含んでいて、新たに環境影響調査をする必要があります。

一方、イヌワシ・クマタカなどの大型猛禽類は、生物多様性に富んだ環境が命綱です。生態系の頂点に立つゆえに孤高です。ここにアンブレラ種のもつ「弱さ」があります。しかし、この「弱さ」こそが自然との共生の鍵となるかけがえのない「弱さ」なのです。ここに立脚点をおくのが環境保全の原点だとする意識が、私を凌駕してくるのを覚えます。

恒例となった夏の徳山村キャンプは、楽しく有意義な集いでした。キャンプでのふれあい、節目ごとに開催した市民交流会、裁判を通じての対応、街頭でのビラ配り、ともに取り組んで結びつきを強くした絆。これを糧として私は今日まで活動を続 けてきたのでした。

「徳山ダムを中止せよ」　スクラムを組んでのシュプレヒコールは、今も徳山の山肌に谺となって響きわたっています。

どうか、みなさん健康に留意されて、それぞれの目指す活動に邁進して下さい。

長い間ご支援頂き、ありがとうございました。

徳山ダムの建設中止を求めてデモ行進する参加者＝24日、岐阜県大垣市内で

↑　1996 年　全国集会

↑　2001 年キャンプ

↑　2005 年　名古屋高裁

２０１１年１２月３０日

代表　上田　武夫

シンポジウム　よみがえれ長良川！　よみがえれ伊勢湾！

～　長良川河口堰開門と生物多様性　～

２０１１年１２月１０日、名古屋市の伏見ライフプラザで、２８０名の参加を得てシンポジウムが開催されました。「長良川河口堰」の問題に多様な面からアプローチする質の高い内容でした。長良川河口堰開門に向けて、このシンポ実行委員会を継続していきます。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

12/10 参加者アピール

長良川河口堰開門調査実現を！

今、愛知県の長良川河口堰検証作業を巡って、熱い議論が起こっています。

長良川河口堰建設に対しては、流域住民から、全国から、多くの疑念と批判の声が上がりました。その声を封じて河口堰は建設され、運用開始から１６年が経ちました。

海と川との繋がりを断ち切った河口堰は、河口部のみならず、川の上流にも伊勢湾にも大きな影響を与えています。疑念と批判が現実のものとして明らかになってきました。

長良川の生態系の劣化を憂える多くの市民の声によって、今年初めの愛知県知事選挙･名古屋市長選挙の共同公約に｢長良川河口堰開門調査｣が盛り込まれ、今般の検証作業が取り組まれています。

昨年、名古屋で開かれた生物多様性ＣＯＰ１０には多数の市民やＮＧＯが関わり、会議を成功させました。生物多様性を保全するための愛知ターゲットが策定されました。

長良川河口堰を開門し、生態系回復へと踏み出すことは、愛知ターゲットが決議された開催地である名古屋・愛知・東海地方の市民の責任です。私たちは、この機会に、河口堰の開門調査を実現したいと願っています。

しかし、残念なことに、開門の権限をもつ国土交通省及び水資源機構は、愛知県の検証作業に強く反発し、開門調査拒否の姿勢を示しているようです。

私たちは、国土交通省、水資源機構、及び関係県市に対し、河口堰開門調査について、共通のテーブルで話し合いを始めるよう、強く求めます。

長良川河口堰の開門は、これまでの「公共事業」のあり方を根本から正す第一歩となるでしょう。

開門調査実現の要は、私たち市民が声を上げることであり、世論を喚起することです。

きょうのシンポジウムの成果を踏まえて、長良川河口堰に関する市民的議論をさらに広げ、開門調査実現へと結びつけていきましょう。

２０１１年１２月１０日

シンポジウム「よみがえれ長良川！よみがえれ伊勢湾！」
－長良川河口堰開門と生物多様性―　　参加者一同

・・

【長良川河口堰開門調査】

愛知県の長良川河口堰検証専門委員会は「５年以上の開門を」という報告書をプロジェクトチーム（ＰＴ）に出しました。しかしＰＴでは異論が出ています。ＰＴ報告書では「開門調査が必要」とは記述されず、国交省が設置した有識者会議との合同会議又は連続公開討論会の開催を求めることがＰＴ報告書のメインとなりそうです（ＰＴ報告書は１月１７日以後)。

１２月２６日、日本魚類学会が「長良川河口堰開門支持」の意見書を発表しました。門調査を「自然再生への重要な試み」「国際社会に誇れる」と評価しています。

【木曽川水系連絡導水路】

来年度予算案に２億９０００万円が計上されています。このうち２億円余りが事務所経費や人件費です。正式に中止にしない限り無駄なお金が使われていきます。

＜導水路裁判＞

「導水路見直し」を掲げて当選した大村知事になった後も、被告・愛知県は「導水路事業に支出する」という姿勢を変えていません。１２月１２日、弁護団は大村愛知県知事と河村名古屋市長を証人申請しました。次回期日（＝２月２３日(木) 11:00 ～）に採否が決まります。

【内ヶ谷ダム】

１０月１２日、岐阜県は国交省に「継続」という検証結果を報告しました。国土交通省はこれを追認することでしょう。しかし完成予定は１６年後。それまでの流域の水害対策はどうするというのでしょう？

2011年会計報告

収入		167.626（現金繰り越しを除く）
支出	現金	301,406
	ＨＰ作成	327,180

支出（現金）内訳

通信費	89,325
郵送費	65,820
他団体の活動協力	85,800
資料・記録費	31,065
紙･文具･機械保守及び雑費	29,396

会としての残高		290, 145
	現金	7,990
	郵便局	29,157
	銀行	252,998
前年からの繰り越し		751, 105
	現金	9,396
	郵便局	161,597
	銀行	580,112

今後の使い途について

①　この号の送料　約１万５千円　　②　ＨＰの保守管理（１０年程度）　約７万５千円
③　運動資料の電子化など　　約１０万円　　④　木曽川水系の運動体へ　　約１０万円
最終的な使途については、事務局長・近藤ゆり子にご一任下さい。

「やめよ！徳山ダム」休刊

2011 年度中に徳山ダムが法的に正式に完成するのを機に 1995 年 12 月 25 日に発足した「徳山ダム建設中止を求める会」の活動を休止します。徳山ダムのもつ問題を世の中に提起していく、という一定の役割は果たせたものと思います。1996 年 3 月に第 1 号を発行した「やめよ！徳山ダム」 もこの号をもって休刊します(＊)。長い間のご愛読、ありがとうございました。

当会としての活動は休止しますが、当会メンバーの活動は終わりません。ブログなどで運動の状況を発信し続けますので今後もご注目下さい。　＊バックナンバーはＨＰに載せています。

徳山ダム建設中止を求める会ＨＰ　http://www.tokuyamadam-chushi.net
事務局長ブログ　http://tokuyamad.exblog.jp/

「やめよ！徳山ダム」　徳山ダム建設中止を求める会　代表：上田武夫
公式 HP　http://www.tokuyamadam-chushi.net　事務局長ブログ　http://tokuyamad.exblog.jp/
編集責任：近藤ゆり子　事務局　〒 503-0875　大垣市田町１－２０－１
TEL/FAX　０５８４－７８－４１１９　Email：k-yuriko@octn.jp

（第3種郵便物認可）

河口堰開門調査

県専門委が報告書採択

否定的委員2人目が辞任

長良川河口堰（三重県桑名市）の開門調査の可否を検討する愛知県の専門委員会は七日、五年以上の開門調査実施を求める報告書を正式に採択した。年内に上部組織の有識者会議に報告し、さらに最終意見をまとめて大村秀章知事に報告する。

専門委は九月下旬に報告書をまとめた後、住民から意見を募り、内容を修正していた。

会合の冒頭、開門に否定的な委員の木本凱夫・元三重大助教授が「報告書に代替水源の具体案が示されず、名前を連ねるのは本意ではない」と辞任を表明。前回にも藤田裕一郎・岐阜大教授が辞任しており、委員八人のうち二人が欠ける異例の採択となった。

報告書では、岐阜県南部の農業用水が取水しない十月十一日～翌年三月末の早い時期に開門調査を始めるのが望ましいと記載。実施には堰を運用する水資源機構や岐阜、三重県、農業関係者などの合意が必要とし、協議機関の設置を求めた。

愛知県が率先して河口堰から取水している知多地方の飲料水を、木曽川から取水する愛知用水に切り替えるべきだとも指摘。愛西市の農業用水「福原用水」への塩害の影響調査や、県庁内の意見統一なども求めた。

委員会終了後、座長を務めた小島敏郎・青山学院大教授は「ある程度の絵は描けた。関係者の合意はいつできるか分からないが、やってみないと分からない。誰かが始めないと、いつまでも始まらない」と話した。

大村知事は「専門委の熱心な議論に感謝したい。今後、有識者会議から最終の報告書が提出されると思うので、その内容を踏まえて適切に対応していきたい」とコメントした。（島崎諭生）

2011.11.08　中日新聞

長良川河口堰

「長期の開門調査必要」

愛知県検証委　岐阜市で市民説明会

長良川河口堰（ぜき）＝三重県桑名市＝の開門調査の是非を検討している愛知県の検証専門委員会は17日夜、長良川中流域の岐阜市で説明会を開き、長期の開門調査が必要とする報告書案の内容を解説した。

市民団体の長良川市民学習会が主催し、専門委の小島敏郎、今本博健両座長が説明した。河口堰問題に関心の高い市民ら約80人が耳を傾けた。

現在、パブリックコメント（意見公募）を行っている報告書案について説明した上で、小島さんは水利権に応じて関係自治体が建設費を負担しているにも関わらず、実際の水需要は低いことを問題視。「要らない水には金を払わないルールづくりが必要ではないか」と考えを述べた。

今本さんは国や水資源機構が過去に行った河口堰の検証が不十分と主張し、「（塩害など）開けることによる懸念もあるが、メリットの大きさと勘案し、より良い未来のために知恵を出していきたい」と語った。参加者からは環境回復に向けて開門調査を強く望む声、農業用水の実態調査を求める意見などが上がった。（西山歩）

愛知県の長良川河口堰検証専門委員会がまとめた報告書案について解説した説明会＝岐阜市橋本町、ハートフルスクエアーG

2011.10.18　岐阜新聞

2011.10.28　朝日新聞

県民意見400件を集約

長良川河口堰専門委　7日に最終報告書

長良川河口堰の開門調査に向けた愛知県の専門委員会は27日、5年以上の開門調査を求めた報告書に対し、県民から募った意見の集約を始めた。開門への批判が多く、専門委はそれらを精査して最終報告書を11月7日に決定する。

インターネットなどを通じて県民意見を募る「パブリックコメント」には、30日間で53人、420件の意見が寄せられた。数値などの誤りの指摘を除くと、開門調査への批判が多かったという。

特に懸念が集まったのは、開門調査によって海水が堰上流の取水口に入り込む「塩害」の影響。報告書は木曽川上流のダムから代わりの水をとって塩害の影響を防ぐとしたが、「代替水源がとれるのか」などと疑問視する意見が寄せられた。

27日の委員会ではこうした意見を踏まえ、元三重大助教授の木本凱夫委員が「報告書は、代替水源の議論（の記述）が手薄だ」と指摘。引き続き専門委で、塩害対策について議論していくことになった。

委員会では、議論の進め方に不満を訴えていた開門反対派の藤田裕一郎委員（岐阜大教授）が9月末で辞任したことが報告された。（佐藤憲子）

■パブリックコメントの主な意見

【報告書全体】
- 「開門調査ありき」の議論に偏っている
- 長良川河口堰の見直しは必要不可欠だ

【塩害】
- 過去に堰上流の岐阜県海津市や三重県桑名市で塩害による農業被害はなかった
- 塩害が起きるかどうかは調査しないとわからないというのは無責任だ

【生態系への影響】
- シジミ類の減少の原因が河口堰であるとする科学的根拠が乏しい
- 河口堰ができてから植物のアシ群が消えた

【代替水源】
- 渇水リスクが高い岩屋ダムは代替水源には適さない

窓 論説委員室から　河口堰論争

大げさに言えば、歴史をひっくり返すような議論が名古屋で行われている。旧建設省（国土交通省）が16年前、批判を押し切り完成させた長良川河口堰が、そもそも建設する必要がなかったのでは、というのだ。

河口堰開門を公約して当選した大村秀章愛知県知事が設けた学者らの委員会が、報告書をまとめた。それが突っ込んだ内容なのだ。

砂利採取や地盤沈下などで川の断面積は十分広がっており、河口堰を造って、しゅんせつするまでもなかった――。

国交省は戦後の降水量グラフから「近年の少雨化傾向」を指摘し、利水施設の必要を説くが、過去130年をみれば、もっと少雨の時期がある――。

環境か、洪水対策か、といった従来の議論とは大きく異なる。

国交省はこれから見解を出す。かつては新聞記事ひとつにも文書で即座に反論していたものだが、政治家主導で始まった議論のせいか、やけに慎重である。見解の公表が委員会終了後とは残念だ。

一部とはいえ、河口堰の水は使われている。諫早湾と同じで、完成した施設のゲート開放は容易ではないだろう。だが、報告書の指摘は河川法改正に至った河口堰の根幹にかかわる。ぜひ公の場で論争し、決着させてもらいたい。

（伊藤智章）

2011.11.16
朝日新聞
（夕刊）→

河口堰

開門求める報告書批判

国交省など 代替水源「枯渇する」

国土交通省中部地方整備局と水資源機構は17日の記者会見で、愛知県の専門委員会が長良川河口堰（ぜき）の長期開門を求め、塩害が想定される上流で取水している水道用水などの代替水源として挙げたダムについて「渇水時には枯渇する」などと批判した。

委員会が水道や工業用水の代替水源として挙げた木曽川水系の岩屋ダム（下呂市）について「2005年の渇水時に代わりに水を利用していたら約600万立方㍍足りず、市民生活や産業活動に大きな影響を与えた。（代替水源として利用すれば）ただでさえ大きい木曽川の渇水リスクを増やす」とした。

委員会が「開門により遡上（そじょう）環境が改善される」としたアユについても「河口堰の魚道は十分機能しており、稚魚の遡上に対する事業の影響はない」と反論した。水資源機構中部支社の富岡誠司副支社長は「委員会では、われわれが示したデータに聞く耳を持ってもらえなかった。議論が十分尽くされておらず、納得できない」と述べた。

2011.11.18
岐阜新聞
←

長良川河口堰

さらに合理的検証を

愛知有識者会議 報告書原案示す

長良川河口堰（三重県桑名市）の開門調査を話し合う愛知県の有識者会議が十五日開かれ、大村秀章知事に提出する最終報告書の原案が委員から示された。原案では、開門調査を「堰の長期開放につながる可能性もある」と指摘。長良川を管理する国の委員会と、県の専門家による合同会議を設け、科学的、合理的な検証をさらに進めるよう提言している。

下部組織に当たる専門委員会は十一月に、五年以上の開門調査を求める報告書を提出した。

有識者会議の報告書原案は、長期開門する場合には、直接影響を観測する開門調査が必要だと指摘。堰上流部で取水する長良導水の代替水源の確保や、塩害が生じないようにすることを実施の条件に挙げた。国や岐阜、三重両県などに開門調査の準備のための委員会設置を呼び掛けるよう求めた。

会議では、専門委の報告書も議論。「河口堰の最適運用イコール開門という結論ありきの安易かつ乱暴な結論」「専門委の選び方が必ずしも適切ではなかった」などと批判的な意見が出された。

有識者会議は今後、各委員が最終報告書の文案を提出し、次回の二十七日に報告書の完成を目指す。

（島崎諭生）

2011.12.16
中日新聞
→

「清流を取り戻そう」

名古屋で河口堰シンポ

東海三県の市民団体によるシンポジウム「長良川河口堰開門と生物多様性　よみがえれ長良川！よみがえれ伊勢湾」が十日、名古屋市中区の伏見ライフプラザで開かれた。河口堰を問題視する専門家や漁師らの講演を二百五十人が聞いた。

開門調査を求める報告をまとめた県の専門委員会で共同座長を務めた今本博健・京都大名誉教授は、生態系への悪影響や利水、治水効果が小さいといった報告内容を説明。国土交通省の専門家会合で対立する結論が出たことに、蔵治光一郎東京大准教授は「公開の場でどんな川を残していけるか議論しなくてはいけない」と主張した。

長良川で漁師を続ける大橋亮一さん(七七)＝羽島市＝は「魚は海へ行こうと思ったら行けれぇへんし、帰ろうと思ったらまた帰れぇへんてことで、ちょっとも上がってこうへん。たった十六年でとんでもねぇ川になっちまった」と話した。

河村たかし名古屋市長は「環境問題から言ったら流れを止めん方がええに決まっとる」とあいさつし、大村秀章知事は「越えられないハードルはない。長良川の清流を取り戻しましょう」と呼び掛けた。（中崎裕）

2011.12.11　中日新聞

11・12・13　毎日新聞

知事、市長の尋問を

木曽川導水路訴訟　市民団体が申請

木曽川水系連絡導水路事業を巡り、愛知県が負担する318億円の支出は違法だとして市民団体「導水路はいらない！　愛知の会」が支出差し止めを求めた訴訟で原告側は12日、大村秀章知事と河村たかし・名古屋市長の尋問を名古屋地裁に申請した。

知事と市長は今年2月の選挙で、ともに導水路事業の見直しを公約に掲げた。市民団体によると、公共事業に伴う公金支出を巡る訴訟で首長の尋問を申請するのは珍しい。

訴訟は市民団体のメンバーら約90人が09年6月、事業推進派だった当時の神田真秋知事らを相手取り提訴。大村知事に代わった後も県側は裁判で一貫して「導水路事業は必要」と支出の正当性を主張しているという。

弁護団の在間正史団長は「知事と県の実務担当者の間にギャップがあるのではないか。首長に直接話を聞きたい」と述べた。地裁は今後、尋問するかどうかを判断する。

導水路事業は徳山ダム（岐阜県揖斐川町）の水を揖斐川から木曽川に流す。総事業費8890億円で国、愛知、岐阜、三重3県と名古屋市が負担。15年完成を目指していたが、09年10月に当時の冨士国土交通相が中止を表明し、今も未工事となっている。【岡大介】

魚類学会、開門調査を支持

長良川河口堰で意見書

愛知県の有識者会議が長良川河口堰の開門調査の是非を検討する中、日本魚類学会（会長＝後藤晃・北海道教育大特任教授）が「生物多様性の著しい回復が見込める」として、調査を支持する意見書をまとめた。学会は、千四百人でつくる国内最大の魚類研究者の集まりで、開門調査への態度を表明するのは初めて。

二十六日に愛知、岐阜、三重の三県の知事と名古屋市長、国土交通相、環境相、水資源機構の理事長宛てに意見書を郵送した。

意見書では、海水と淡水が混じる汽水域に河口堰が設けられ、「川と海を回遊する魚類の生息環境を著しく変化させた」と指摘。堰上流は淡水化され、「ヨシ帯やカニ、ゴカイ類などが激減し、汽水性の魚類も多くの生息場を失った」としている。

その上で、開門調査を「自然再生の重要な試み」と評価。自然の保全と復元の責務を定めた生物多様性条約に触れ、「後世代に残すべき貴重な自然を認識し、条約の責務を果たすことで国際社会に誇れる」として調査実施を求めている。

意見書の提出は学会に、評議員の向井貴彦・岐阜大准教授が提案した。向井准教授は「開門調査で汽水域が回復すれば、伊勢湾全体の環境改善にもつながる」と話す。

開門調査をめぐっては愛知県の有識者会議の専門委員会が十一月、五年以上の開門調査の実施が望ましいとする報告書を採択。国交省は「塩水が堰の上流に残って水中の酸素濃度が下がり、生態系を壊すおそれがある」、岐阜、三重県は「塩害が起きる」などと開門調査に反対している。

2011.12.26

中日新聞（夕刊）

2011.11.29
← 中日新聞

電中 徳山水力1年延期

工事に遅れ、15年運転開始

中部電力は二十八日、岐阜県揖斐川町の徳山ダムで建設している徳山水力発電所1号機（出力一三・一万キロワット）の工事に遅れが出ているとして、運転開始時期を計画より一年延期し、二〇一五年六月に変更すると発表した。

1号機は地表から約八十メートル掘削し、水車や発電機を設置する。中電によると、事前調査では岩盤までの深さを約二十メートルと想定していたが、さらに六メートル深い地点が一部で見つかったため、掘削時に周辺地盤の崩壊を防ぐ工事が追加で必要になった。今年一月末の大雪で現場への道路が通行止めとなった影響もあり、工期は既に七カ月半遅れているという。

2011.12.25
中日新聞 →

東海のダム 凍結継続

「八ツ場」再開 歓迎と警戒

二〇一二年度政府予算案で群馬県の八ツ場ダムの建設再開が盛り込まれる一方、東海地方の主要なダム建設は引き続き凍結された。推進派は「八ツ場が将来に向けた追い風になる」と歓迎。反対派は、なし崩し的に再開されるのではないかと警戒を強めている。

三重県の川上ダム建設を求める住民団体代表で、同県伊賀市在住の西山甲平さん(七五)は「八ツ場ダム再開は弾みになる。これで川上も大丈夫だと確信した」と期待。愛知県の設楽ダム建設の旗振り役、横山光明設楽町長も「設楽の建設も当然のことになると思う」と語った。一方、前回の設楽町長選で建設反対を訴えて落選した伊奈紘さん(六七)は「民主党はマニフェストで脱ダムを約束していたのに正直、がっかりだ。建設推進派が勢いづく」と表情を曇らす。

岐阜県の徳山ダムにためた水を愛知県などに送る木曽川水系連絡導水路の建設に反対する市民団体の近藤ゆり子事務局長は「八ツ場ダムは国側が結論ありきの検証をしていた。冷静な受け止め。「木曽川流域の水余りは検証が必要ないほどに明らか。事業は中止すべきだ」と訴えた。

川上、設楽両ダムと木曽川水系連絡導水路は一二年度予算案で、住民の移転補償や環境調査などの費用が認められたのみで、設計など着工に向けた費用は計上されなかった。

11・12・06 中日新聞

大きなアユ減少 遅い時期に産卵

岐阜の長良川で「見る会」

写真家の新村さん解説

アユの産卵の映像を見ながら、新村さん(右)の説明を聴く参加者＝いずれも岐阜市の長良川河川敷で

「アユの産卵を見る会」が五日、岐阜市の長良川河川敷で開かれた。（山本真嗣）

長良川河口堰の影響

長良川河口堰の影響を定点観測しようと、写真家の新村安雄さん(五七)＝岐阜市＝が毎年、開いており、今年で二十二回目。

午後四時ごろ、長良橋下流の産卵場がある水深十五センチほどの川底に水中カメラを置き、河川敷に設置したスクリーンで映像の観察を開始。水中には無数のアユが命をつなごうとびっしり。黒とだいだいの婚姻色がはっきりと現れた十五センチほどの無数の雄がひしめく中に、やや大きめの白っぽい雌が下流から突っ込み、産卵した。

水中カメラ映像で紹介 河口堰開門訴え

産卵のため雌に群がる黒っぽい婚姻色をした無数の雄

新村さんによると、長良川のアユの産卵時期は、河口堰ができる前は九月中旬から始まり、十月下旬には終わっていた。だが、年々、大きなアユが減り産卵時期が遅くなっており「今年は始まったばかりではないか」と推測。河口堰ができる前よりピークは一カ月ほどずれてきているという。

理由として新村さんは、ふ化したアユの子どもが河口堰により潮の満ち引きが利用できないため、早い時期に産卵する大きなアユの子どもは海に自力で下る前に水温が高すぎて力尽き、遅い時期に産卵、ふ化する小型のアユの子孫だけが生き残っていると指摘する。

新村さんは「県庁所在地の中心でアユの産卵が観察できるのは素晴らしいこと。自然のサイクルに戻すためには河口堰の開門しかない」と話している。